

は じ め に

ポスターのもととなった詳細なデータは、RECNAのスタッフによって構成される「核物質データ追跡チーム」が作成したもので、ホームページ (<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/nuclear/fms>) で公開しています。さらに詳しい内容を知りたい方はそちらをご覧ください。

2018年7月

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)
長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel:095-819-2252 Fax:095-819-2165

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/pcu>

しおり
2018.7

107,417

**核兵器廃絶
長崎連絡協議会**
PCU-Nagasaki Council



必要となります。

2018年7月

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)

このように近代核兵器には、高濃縮ウランとプルトニウムの両方が使われています。これらの核物質を手に入れるには、ウラン濃縮または再処理技術・施設が

300 キロトン程度と推定されています。

的に起こさせるために濃縮ウランが使われています。この図は米国の大陸間弾道ミサイルに搭載されているW87 型核弾頭のデザインとされていて、爆発力は

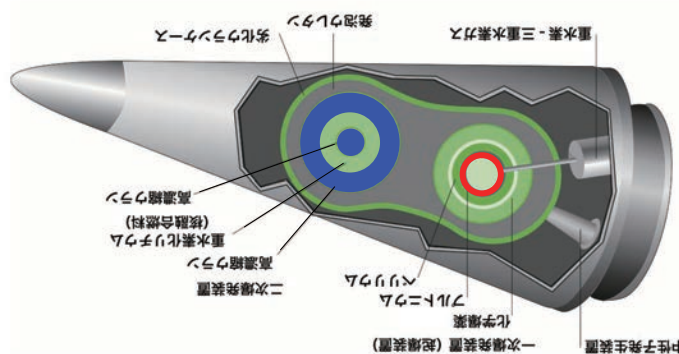
上の図は、一般的な核弾頭の概念図です。核融合反応を起こすために必要なエネルギーを起爆装置であるプルトニウム原爆で発生させ、さらに核融合反応を効率

にその千倍のメガトンの規模にすることができます。

核兵器には、核分裂反応による原子爆弾(原爆)とさら
に核融合反応を用いた水素爆弾(水爆、熱核爆弾とも呼
ぶ)の二つがあります。原爆でも TNT 火薬換算でキロ
トン、すなわち千トンの爆発力があり、水爆ではさら

出所: Frank von Hippel, et al. "UnMIT Press, 2014, p.40 を一部改変。

一般的な核弾頭の概念図



742411. 龍虎の番付

国名	軍事用(%)	非軍事用(%)
ロシア	94.0	91.5
米国	38.4	49.4
フランス	6.0	65.4
中国	2.9	0.04
英国	3.2	110.3
イスラエル	0.9	
パキスタン	0.3	
インド	6.6	0.4
北朝鮮	0.04	
日本		47.0
ドイツ		0.5
他の非核保有国※		1.8
小計	152.3	366.3
合計	518.6	

使用済み核燃料の中に入ったまもの、分離されていない
ルトウムは含まれません。米国・英国以外の事商用プ
ルトウムは推定値なので不確かな値です。長崎原爆には
6kgが含まれていたと推定されています。

※オランダ、イタリア、スペイン等

※オウシタ、イタリア、スベイン等

。6k8f!5marteitaito推定されています。

[illegible]

す。米国もまた新しい非軍事用の濃縮施設を建設する計

一方、民生用としてほろソンス、ドイツ、オランダ、ロシア、英国、中国、日本、米國に濃縮施設があり、これが、アラビシ、アラソ等が新しく参入しようとしているま

他国から手に入れたもので、自前の施設はありません。

施設は現在も運転中です。イスラエルの高濃縮ウランは

五大核保有国の軍事用のウラン濃縮施設はすべて生産を停止しています。しかし、インド、パキスタンの軍事用

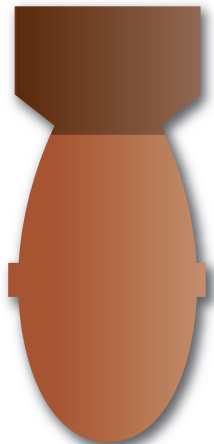
それです。

※高濃縮ウランを1kg以上もっている国は15カ国(ボスニアを参照、ただしスロベニアはアルミニウムだけで、高濃縮ウランはほとんどありません)。それらの量は秘蔵品扱いされています。

米・国・英以外の軍事用高濃縮ウランは推定値なので正確な値です。広島原爆には64kgが含まれていたと推定

国名	軍事用(%)	非軍事用(%)
ロシア	670.0	9.0
米国	479.4	95.1
フランス	26.0	4.8
中国	14.0	0.24
英国	19.8	1.4
イスラエル	0.3	
パキスタン	3.3	
インド	3.6	
北朝鮮	0.04	
非核保有国※		15.0
小計	1,216.9	125.6
合計	1,342.5	

世界の労働人口の減少



プルトニウム

プルトニウム は、天然には存在しない人工放射性元素であり、原子炉を運転すると自動的に生成されます。例えば、世界で最も多く使用されている軽水炉の使用済み核燃料には重量で約 1% のプルトニウムが含まれています。この使用済み核燃料からウランと核分裂生成物を取り除き、プルトニウムを回収する方法を「**再処理**」といいます。

プルトニウムにはいくつかの種類がありますが、原子炉の運転条件によってできる割合が変化します。原子力発電所の使用済み核燃料から回収されるプルトニウムは、一般的にプルトニウム 239 の割合が 60% 程度（原子炉級プルトニウム）で、軍事用の原子炉ではこれが 90% 以上（兵器級プルトニウム）となります。

原子炉級プルトニウムは、爆発力を下げる可能性のあるプルトニウム 240 を多く含むため、核兵器製造には「適さない」という意見がありますが、これは正確ではありません。原子炉級プルトニウムで製造した核兵器であっても、通常兵器をしのぐ爆発力があることに変わりはありません。そして、より高度の設計技術を用いれば、より破壊力の大きな兵器を製造することが可能なのです。

核兵器の材料になる核物質

ウラン は天然放射性元素の一つで、いくつかの種類があります。天然のウランは、核分裂が起きにくいウラン 238 が 99.3% を占めていて、核分裂性のウラン 235 はわずかに 0.7% です。そのためにウラン 235 の濃度を高める必要があり、その作業を「**ウラン濃縮**」といいます。

通常の核兵器で使われているのは 90% 以上に濃縮されたものですが、20% 以上であれば核兵器に利用できると考えられていて、これらを「**高濃縮ウラン**」と呼びます。一方、普通の原子力発電所で用いられている核燃料は、3 ～ 5% 程度に濃縮したもので、そのウランを「低濃縮ウラン」と呼びます。

民生用の低濃縮ウラン施設であっても、高濃縮ウランの生産は技術的に容易です。例えば、100 万キロワット級原子力発電所 1 年分の濃縮ウラン供給能力（年間 130 トン）をもつ施設では、150 トンの天然ウランから 93% の高濃縮ウラン 100 kg（原爆 4 個分相当）を 1 年で製造することが可能です。また、4% の低濃縮ウラン 20 トンから、わずか 8 日で 93% の高濃縮ウラン 100 kg を製造することもできます。ただし、技術的には容易であっても国際原子力機関が監視したりするので、非核保有国で高濃縮ウランを秘密裏につくることは容易ではありません。



ウラン

軍事用／民生用 プルトニウム

軍事用：核兵器内にあるか、核兵器に使用する目的のプルトニウム、及び将来に軍事利用の余地を残したまま貯蔵しているプルトニウムのこと。

民生用：軍事用でない原子炉の使用済み核燃料から分離したプルトニウム、及び兵器用としては余剰と公表されたプルトニウムのこと。

核兵器に必要な不可欠な原材料は高濃縮ウランとプルトニウムです。

これらの核物質を手に入れるためには、ウラン濃縮または再処理技術・施設が必要です。原子力発電でも、「核燃料サイクル」施設として、これらの 2 施設をもっている国があります。たとえ小規模であっても核燃料サイクル施設を手にすることは、軍事利用可能な核物質を生産する能力をもつことになるので、核兵器拡散の危険性は大幅に増加するのです。

国際原子力機関 (IAEA) はウラン 235 が 25kg、あるいはプルトニウムが 8kg あれば核兵器を製造することが可能と考えています。

軍事用／民生用 高濃縮ウラン

軍事用：核兵器内にあるか、核兵器に使用する目的の高濃縮ウラン、または原子力推進軍艦の原子炉燃料に用いられる高濃縮ウラン（使用済みを含む）のこと。

民生用：研究・試験炉の燃料中の高濃縮ウラン、及び軍事目的としては余剰と公表された高濃縮ウランのこと。

原爆をこれだけ つくれる 原料がある

広島原爆には高濃縮ウランが 64kg、長崎原爆にはプルトニウムが 6kg 含まれていたと推定されています。この数字を用いて、各国がもっている核物質の量を、相当する原爆の個数に換算して棒グラフで表しました。いずれも濃い色が軍事用です。

高濃縮ウランは減少 傾向、プルトニウム は増加傾向にある

高濃縮ウランは軍事用が 90% を占めます。ここ 10 年間で軍事用は 75 トン、非軍事用は 252 トン減りました。逆にプルトニウムは非軍事用が 71% です。この 10 年間で軍事用が 1.0 トン減り、非軍事用が 26.0 トン増えています。

非核国日本の 突出するプルトニウム

日本がもっている分離プルトニウムは、ロシア・英国・米国・フランスに次いで 5 番目に多く、世界の 9% 近くもあります。他の非核保有国は全部合わせても 0.4% ですから、いかに日本が突出しているかがわかります。

核物質を 減らすことも 大きな課題

世界の核物質は広島原爆・長崎原爆に換算すると 10 万発分以上になります。一方、世界の核弾頭は 14,450 発と推定されています。計算上は現在の何倍もの核兵器をつくらせてしまうのです。核兵器を解体しても核物質は残ります。核物質を処分したり、再び核弾頭に戻せない処理をしていくことが必要です。

核兵器に使われる恐れがある 世界の核物質データ 2018.6

